

モンスター娘に襲われる A S M R ～デュラハンのアイリー編～

(Attacked by a Monster Girl ASMR - Dullahan Girl Airy Version -)

あらすじ：

冒険者が訪れる大樹海には、死を超越した魔物——アンデッドもいる。特にデュラハンは出会ったものに死をもたらすとされる恐ろしい存在だ。

樹海に迷いこんだ御者の少年は、そんなデュラハンに出会ってしまった。馬が動かなくなり困っているデュラハンを助ける少年——しかし、デュラハンはそのお礼に、自由自在に飛び回る生首と、豊満な肉体でご奉仕をしてくるのだった。一見すると優しいデュラハンだが、それはもちろん罠。デュラハンは一生、ドジな自分の世話をしてくれる相手を探していたのだ。このままデュラハンと、廃墟の屋敷で暮らすか、それともデュラハンになって、死後の生活を共にするかを問うてくるのだった。

登場キャラクター：

デュラハンのアイリー：

樹海に棲むデュラハン。女騎士の姿をしており、死期が近いものの前に姿を現すと言われる。男らしい口調で話すが、実はドジっ子であり、自分の愛馬はあまり言うことを聞いてくれない。長い銀髪が自慢であり、毎日しっかりと手入れしている。手頃な御者でもないかなーと思っていたところ、冒険者の少年を発見。自分の召使として屋敷に連れ帰ることを画策する。頭はよくしゃべるが、肉体は無抵抗気味。アンデッドなので生者に未練があり、子孫は残せなくても性交に対しては積極的である。

少年冒険者：

樹海に迷いこんだ御者の少年。冒険者たちを馬車で運ぶ仕事をしていたが、魔物に襲われ馬も馬車も失った。夜が迫る樹海をさまよい歩いていたところ、デュラハンに出会ってしまう。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い ～ドジっ子首無し騎士～

アイリー「ええい、言うことを聞けっ。私の馬だろう……進め！ 歩け！」

アイリー「なぜ動かないのだ……。このまま馬を置いて帰るわけにもいかんし、どうしたものか……」

アイリー「ん？ そこにいるのは誰だ？」

アイリー「おい、逃げるな！」

アイリー「逃がさんぞ……って、我が身体よ、何をしている!? 自分の首を投げるんじゃない！」

アイリー「おわあああああああああ！」

アイリー「はあ、はあ……まったく、突然投げられたらびっくりするじゃないか。自分の頭なんだぞ、もっと丁重に扱え！」

アイリー「おっと……ほう？ そこで腰を抜かしているお前は……もしや人間か？」

アイリー「身体よ、そいつを立たせてやれ」

アイリー「どうした？ んっふっふ、後ろから抱えられたくらいで、なにをそんなに驚いている？」

アイリー「そう、私は人間ではない。デュラハンだ」

アイリー「今見たように切り離された頭と身体を自由自在に動かせるんだぞ。ははは、便利だろう？ ……おい、身体よ、自分の頭だろう、早く拾え」

アイリー「まったく……自慢の銀髪に枯れ葉がついてしまったじゃないか」

アイリー「さてと、お前は……見たところ御者のようだな。であれば、馬の扱いには長けているだろう？」

アイリー「お前、この馬を動かせるか？ デュラハンの馬ゆえ、こいつにも首から先は無いが……扱い方は普通の馬と変わらんだろう？」

アイリー「とても良い馬ではあるのだが……これがなかなか気性が荒くてな。私の言う事を聞かんのだ」

アイリー「試してみてください」

アイリー「おおお！ 歩いたぞ！ 私があれっだけ押しても引いてもビクともしなかったのに見事だ！」

アイリー「ふむ……おとなしく歩いているな。……いいぞ、気に入った。おい、一度止まれ」

アイリー「お前を私の従者にしてやる」

アイリー「もう決めたんだ、お前に拒否権はない。安心しろ、タダでとは言わん」

アイリー「たーっぶり、ご褒美をくれてやる」

アイリー「さあ行け。私の屋敷はすぐそこだ。このまま私の代わりに馬を引いて連れていってくれ」

アイリー「んっふっふっ、楽しくなるな……♪」

2. 耳舐め ～どこでも自由自在～

アイリー「ふう、ようやく帰ってこられたな」

アイリー「適当な椅子に座ってくれ。それなりに綺麗にしてあるはずだ」

アイリー「どれ、私も隣に失礼しよう」

アイリー「改めて自己紹介しよう。私はアイリー」

アイリー「そう、察しの通りアンデッドのデュラハンである。だが……身体の上に頭を乗っけていたら普通の人間とそれほど変わらんだろう？」

アイリー「そしてお前は、デュラハンである私に連れられ、のこのこと屋敷までやってきてしまったというわけだ。んっっふっふ」

アイリー「では早速――――」

アイリー「とっても気持ちいいご褒美をくれてやる」

アイリー「お前も好きだろう？ 隠さなくていい」

アイリー「もちろん、私も気持ちいいことが大好きだ」

アイリー「アンデッドとは死を超越した存在。時間に縛られず磨き上げた我がテクニックを披露してやろう……」

アイリー「どれ、試しに……我が身体よ、こやつの耳元に私の顔を持っていくのだ」

アイリー「すう～、はあ……。すう～、はあ……」

アイリー「吐息が耳にかかってくすぐったいか？」

アイリー「じっくり焦らせば意識が耳に集中し、感覚が研ぎ澄まされていくだろう。そこへ狙いすました一撃を喰らわせてやるのさ」

アイリー「焦る必要はない。夜は始まったばかり」

アイリー「今夜は寝かさないからな」

アイリー「んっふっふ。一度言ってみたかったんだ、このセリフ」

アイリー「すう～、はあ……あ、んふふ。ふう～」

アイリー「耳が赤くなってきたな……そろそろ舐めてみようか。どんな反応をするか見物だな」

アイリー「……ちゅっ。ちゅっ……ちうう。れるお」

アイリー「必死に樹海の中をさまよい歩いたのかな？ 少し汗の味がするぞ。ふふふ」

アイリー「えろ、れるる……はあ、ん、すう～……えるえるえる、ん……はあ、ん」

アイリー「ちう、ちゅうう、んはっ……はんむ、んむんむ……んぶはあ、あん」

アイリー「……はあ〜、おいしいい」

アイリー「んっふっふっ。デュラハンでも唾液は出るんだぞ？ ほら、たっぷり溜めた唾液を舌に絡ませて……」

アイリー「じゅるる、ん……んちゅ、るろろろ……」

アイリー「生首に舐められて気持ちよくなってるのか？ いい趣味をしているじゃないか」

アイリー「あーん……んむ、んむんむ、ん、ふう。すう〜……えるるるお……えろえろえろ」

アイリー「アンデッドであるこの私の、ねっとりした柔らかーい舌を耳の中まで優しく差し込んでやろう」

アイリー「んあ……んちゅ……ぬち、ぬちゅ……ぢゅるぢゅるぢゅる……はふ、んぢゅるるるるる」

アイリー「ちょ……我が身体よ、夢中になってあんまり押し付けすぎると……あ、ふあ？」

アイリー「んぐ、むあ……あぐ、ぢゅるるるるううう、んああ……はふ、ん、あむん、ん、あん」

アイリー「あ……んむ、口の周りが自分のよだれでべとべとに……ふあ、じゅるるる、じゅるん、んふあ……ろろろろろ」

アイリー「ちう、ちうううう……あ、こぼれてしまう。ん、ふあ……ぢゅるるる、はう、んあ、はあああ〜」

アイリー「ん、すまんな……身体があんまり押し付けるもんだから、唾液が首筋にまで垂れてしまった。安心しろ。ちゃんと舐めとってやるからな」

アイリー「えるお……ちう、ぢゅるるるるる……。あ、耳より首筋の方がしょっぱいな。んふふ……たくさん汗をかいてしまったのだな。きれいにしてやらねば」

アイリー「えろえろえるお……ぢう、ぢゅるるるんっ」

アイリー「首を自由に動かせるからな。こうやって……このまま、舌を出したまま……うなじの方まで舌を這わせて……」

アイリー「えろ、えろ、えるお、えるるるる……たっぷりの唾液でとろとろになった舌が首の周りをぐる〜っと……」

アイリー「えろ、えろ、えろ、えるるるるる……。ん、ちゅ、ぢゅうううう。んはあっ……はんむ。えんろろろろおおお」

アイリー「じゅるる……んちゅ……ほら、左側まで来てしまったぞ。あむ……えろろろ
ろ、るろろろろ……ん」

アイリー「人間ではこんな動きはできないだろう？ ちう、ちう……んはあ……るろろろ
ろろろ……おん、は、はふう……ん、ぢゅるるるるる」

アイリー「左の耳までできてしまったな……んふふ。首を舐めながらぐるっと一周回るな
ど、デュラハンなら容易いことよ」

アイリー「では左の耳もたっぷり味わわせてもらおうか」

アイリー「はあ……あ、ああーん、むっ……んむんむ、んふ。はむはむ」

アイリー「お前の耳は柔らかい耳だな……とても舐めがいがあるぞ？ んふふ……ちゅ
っ」

アイリー「すう～……はあ……えろ、えろえろえろ……ん。ちう、ちう、ちう……」

アイリー「ん……えるるるる、はむ、ん……ぢゅるっ、んちううう……ん、んあ、ふはあ
……」

アイリー「はあ……耳だけでそんなトロけた顔になってしまっは……この後が大変だな
あ？ どうするんだ？」

アイリー「このあと、もっと敏感なところを舐めてやろうと思っているのだが？」

アイリー「ほら、ほらほらあ……耳の中に入ってくるこの柔らかい舌が……えろ、える
お、ぢゅるるるる……楽しみだろう？ 正直に言ってみろ。どこを舐めてほし
いんだ？」

アイリー「えろえろえろ……ん、もちろん、舐めるだけじゃないかもな？ んむ……ぢゅ
ぢゅぢゅ、ぢゅうううう、ん、あ」

アイリー「こんなにえっちなことをしていたら……」

アイリー「私だって、シたくなってしまうよ」

アイリー「アンデッドだってな……興奮すれば、あそこが濡れてきてしまうんだ……」

アイリー「はあ……あ、ああ……ん、ぢゅるるる、ん……える、える、ふは、はあ、はあ
……んんあ、ん。るろろろろろろ」

アイリー「ん、はあ……想像したか？ 期待したか？」

アイリー「じゅるるるるるっ……はあ～……んあ、んちゅ、ぢゅうぢゅうぢゅうううう
……」

アイリー「なあ……私の従者になって……はあ、はあ、はふう……ん」

アイリー「ご主人様とセックスしたくはないか？」

アイリー「んん？ んふ、んふふ、んっふっふっ。アンデッド相手でも、ちゃんとおちんぽは勃起するみたいじゃないか」

アイリー「まあ、私の手にかかれば……いや、手など使わずとも、口と舌だけでこの通りよ」

アイリー「だが、これはまだまだ序の口」

アイリー「お前が自ら従者にしてくれと懇願するほどの快楽を、とくと味わうといい……」

アイリー「じゅるり（舌なめずりのイメージで）」

3. フェラ ～髪コキ、生首フェラ～

アイリー「では……もっと気持ちのいいご褒美の時間だ」

アイリー「我が身体よ、やつのズボンを脱がせ」

アイリー「おお、立派じゃないか。そんなに待ち遠しかったのか？」

アイリー「よし、私の顔を奴のいきりたったおちんぽの前まで持っていくのだ」

アイリー「んふふ、今、お前のおちんぽを静めてやるぞ……」

アイリー「まずはこんなのはどうだ？」

アイリー「私の自慢の髪でお前のおちんぽを撫でてやろう」

アイリー「ふふ、毎日きちんと洗っているからな。サラサラだろう？」

アイリー「毛の束を作って、優しくなぞって……ほらほらぁ、どうだ？」

アイリー「くすぐったいか？ まあ、少し我慢するんだ。じきに気持ち良くなってくる」

アイリー「細い毛先で裏筋をくすぐってやるぞ。すごく敏感な場所なんだろう？」

アイリー「おやぁ？ おちんぽがびくびく反応しているなぁ？ 硬さも増してきたんじゃないか？」

アイリー「正直に言え。気持ち良くなってきたんだろう？」

アイリー「鈴口や尿道口も優しくつついて刺激してやろう」

アイリー「おお、なんと元気なおちんぽだ。一丁前に暴れるではないか。いいぞいいぞ？」

アイリー「お、おい、身体、ちゃんと私を持たないか。さっきから顔にぺしぺしとおちんぽが当たっているぞ」

アイリー「まさかこんな暴れん坊だとはな……んふふ、これは主としてちゃんと面倒を見てやらねば……」

アイリー「髪をおちんぽに巻き付けて……ぐるぐると、何重にも丁寧に巻き付けて……」

アイリー「私のさらさらヘアで包んだまま、お前のおちんぽをしごいてやろう」

アイリー「んふふふ、ご主人様の髪でシゴかれる気分はどうだ？」

アイリー「細くて柔らかい髪の毛がよい具合の摩擦になっているだろう？」

アイリー「ん、ふ……ほら、ほらぁ……しこしこ、ぎゅっ、ぎゅっ……ってえ」

アイリー「もっと大きく、もっと固く。従者を鍛えるのも主の役目。おちんぽも私が鍛えてやろう。ほら……」

アイリー「おや？ 先っぽからなにか溢れてきたぞ？ 我慢汁かな？」

アイリー「デュラハンの髪でシゴかれて興奮するなんて……」

アイリー「この変態め」

アイリー「節操のないおちんぽだ。もっと気持ち良くなりたいんだろう？ よしよし、じゃあ次はあ……ちゃんとお口でもシてあげるからなあ」

アイリー「おとなしくしているんだぞ……？ ちゅっ、ちゅう……ちう」

アイリー「舌で敏感な所をいっぱい舐めてやろう」

アイリー「える……えろ、えろろ、るろお～……ん、はあ……う」

アイリー「少しひんやりするかな？ アンデッドだからな。人間の体温より少し低いんだ」

アイリー「ん、えろろ、るろろろお～……ん、は、えろえろえろ……るろろろろお」

アイリー「熱々のおちんぽに……少し冷たい舌が、ゆーっくり這ってえ、えろえろ、えるるるる」

アイリー「んんう……でもお、おちんぽ全然冷めない。どんどん熱くなるう……える、るろろろろろお～」

アイリー「はあ……ん、私は首が自由に動かせるからな……色んな角度から舐められるんだぞ」

アイリー「るらあ……ろるるる、ろろろお～、えろろろ、ん。はあ……そろそろ啜えてしまおうかな」

アイリー「ああ～……ん」

アイリー「ん、んん……んはあ、はふ、ふごい……熱いな。あ……んむ、口の中いっぱいを感じるぞ、お前の熱をお……」

アイリー「ちゅう、ちうううう、ん……はっ、ちゅっ、はんむ、んむんむ、はうん」

アイリー「んっ、んもっ……私、首はあ……無いからあ……んんおっ……奥までえ、啜えられるぞ」

アイリー「ん、んぐ、んご……ん、む、んむぐ……はっ、はあぁっ……あんむ、お、おぐ……んご、おお……ん、あ、ぐ」

アイリー「んふふ、気持ちよさそうじゃないか。でも、もっとだろう？ さらに褒美をくれてやるぞ」

アイリー「私の身体をお前のすぐ横へ移動させて……」

アイリー「ほら、お前の目の前に、私のおっぱいだ」

アイリー「分かっているぞ？ 気づいていないとでも思っていたか？」

アイリー「気になっていたんだろう？ 触りたかったんだろう？ 好きなだけ舐めて吸っていいんだぞ？」

アイリー「特別に許してやる。ご褒美だからな」

アイリー「んっ！ ……はっ、はぁ……んふふ。人の舌は熱い、な……。いい心地だ。ん、ふう……よしよし、いい子だ……あん」

アイリー「はぁあ……あ、夢中になって吸いおって……あぁ、身体の興奮が頭にも伝わってくる……」

アイリー「私の乳首がぴんぴんになってしまっているじゃないか……ん、はぁ……あ、お前は大きなおっぱいが好きなのか？」

アイリー「ならば私もぉ……おちんぽいっぱい舐めて吸ってやるからな。片腕で頭を支えると少し不安定だが……ん、んあぁん。おちんぽ、啞えて……えあ」

アイリー「あ、んん……えろろろ、るろろろろぉ……おん、んはぁ、ん……ちう、じゅる、ぢるるるるる」

アイリー「は、はぁ……おっきなおっぱい吸いながらぁ、おちんちん吸われてえ、気持ち良くなってるのかぁ？ ……あ、んん」

アイリー「あん、んぐ……んごお、じゅるる、ちう、ん……ちう、ぢるるるるる」

アイリー「おちんぽいっぱい舐められてえ、ちゅうちゅう吸われながらぁ……ん、んあ、大好きなおっぱい吸えるなんてえ、なかなかできる経験じゃないだろう？」

アイリー「んんっ……私の身体もぉ、乳首吸われてぴくぴく反応してしまうう」

アイリー「んんぐう……私の身体もぉ、快感に夢中になっているぞ……ん、でも待て、我が身体よ、ちゃんと頭を持つんだ。あんまり押し付けると、おちんぽが喉の奥まで……」

アイリー「んぐっ……っご、おぐ。ふはっ……はひゅ。片腕で支えられて不安定だが、私ももっと本気を出さねばな……♪」

アイリー「ん、ふあ……あむ、ちう、ちゅる、ちゅろろろろろ～……お、ん、はあっ……ああん、んぐう……おむ、あんむ、んぐっ……は、あ、あっ……あんむ」

アイリー「デュラハンの大きなおっぱいを吸うのに必死になって……かわいいな、お前。ん、ふ、ふあ……あ、ん」

アイリー「んぐ……あんむ、ちううっ……はっ、ふはぁ。えるろ、るろおおおお。……ん、あるお……むぐう、は、はっ、んあむ」

アイリー「すごい……おちんぽ、ぱんぱんになって……イキそうなのか？」

アイリー「いいぞ、好きな時にイケえ……しっかり啞えてやるからぁ……生首に向かって、思いっきり精液出してしまえっ！」

アイリー「ん、んん、んんんっ！ んご、は、あ、あ、おちんぽ、びくびくしてえ……ほ
ら、イケ、イケえ……イっちゃええ……！」

アイリー「んごおおおお！ ん、んむ、かはっ……はふ、あ、出てる……熱い、すごい熱
いい……」

アイリー「全部、吸いだしてやるからな……ちう、じゅるるるるるる、ん、ぷはっ……
はあ、はあぁあ、まだ出るうう」

アイリー「んんんっ！ んあぁあぁあぁっ！ すごい、またいっぱい出て……あ、もぉ…
…髪にかかったじゃないかぁ……はあ、はあ」

アイリー「そんなに気持ち良かったのかぁ～？ この私にい、デュラハンにされるフェラ
が……」

アイリー「はあ……あ、だがな、まだまだ褒美はあるんだからな？ ん？ こんなんで満
足していいのか？ んふふ……」

アイリー「次は……お前ががんばる番だぞ。一緒に気持ち良くなろうな？」

4. 性交 ～身体は無抵抗～

アイリー「では……うん、そうだな。いったん首はすぐ横の、よく見える所に置いておいてっと……」

アイリー「私の身体は仰向けにしておこうか」

アイリー「ほ～ら、これでよく見えるか？ ご主人様の身体、綺麗だろ？ 触ってもいいんだぞ～」

アイリー「そう、抵抗しないから、覆いかぶさるようにして好きにしていんだぞ」

アイリー「んふふ……首の無い身体に興奮するド変態従者め……♪」

アイリー「次はどうする？ この身体にナニをしたい？」

アイリー「どうすればいいかなんて、言わなくても分かるだろう？ 無抵抗の女の身体に覆いかぶさって、これからやることなんて決まっているだろうが」

アイリー「セックスだよ。セックスをしよう」

アイリー「あんっ……やはりおっぱいから触るんだな。スケベな触り方じゃないかあ。ご主人様に欲情してえ、悪い従者だあ」

アイリー「でもお……いきなりおちんぼを入れてきたりしないで、紳士な振る舞いじゃないか。大切にされてる感じがしてうれしくなってしまうな」

アイリー「でももし我慢しているなら……いいんだぞお？ 強引なもの嫌いじゃないし……ほらあもっと好きにしていえ……んあああっ」

アイリー「おっぱいに顔をうずめて……どれだけ好きなんだお前は。紳士かと思えば子供みたいに……んふふ、おもしろいやつだな、お前は」

アイリー「は、はあ……ん、ふ、はふ……はあ、はああ、ん、んん」

アイリー「お前の火照った身体が、私の少し低めの体温に心地いい。すごくいい感じだぞ……はああ、ん」

アイリー「たくさん触って、たくさん舐めてくれ、もっとお前の熱を感じさせてくれ」

アイリー「あ、ああ……はう、乳首をくりくりして……そこは敏感なんだぞ……あ、んんう」

アイリー「んあ……乳首を優しくつまんだり、先端だけ指の腹ですりすりして……あああ、もどかしい快感で、さらに感度が高まっていくう」

アイリー「は、ふ、ふあ……乳首舐めて……よだれでぬるぬるになったところを、唇でやさしく挟むのお……それも好きだ。ん、はあ……んあ、んん」

アイリー「敏感なところだけ熱を帯びていく感じが……あ、んん……はっ、ああ……気持ちいい」

アイリー「はあ、はあ……なあ……？ 下も、下も触ってえ……」

アイリー「んっ、んんっ……あ、そう、そこがクリトリスだ。興奮して、ぷっくり膨らんでしまっているな。ははは……さすがに少し恥ずかしいい……ん、ほう」

アイリー「あああ、そのもう少し下……そのまま指でなぞって行って……ほら、おまんこの穴があるだろう？ 分かるか？」

アイリー「は、ん……ふ、もう、びちょびちょになってしまっているな……まさかこんなに濡れてしまっているなんて」

アイリー「はあ、んふ……ふ、お前に触られて、興奮してしまっている証拠だぞ？」

アイリー「ほら、責任とってもらって気持ち良くするんだ……垂れてる愛液を指ですくって……ぬるぬるの指でクリトリスを優しくこすってえ……ん、んんんっ」

アイリー「あ……そう、そこが一番敏感、なのっ……んああ、ん、ああう……あっ」

アイリー「ん、んああっ、お前に触られたら……アンデッドなのに、おまんこ熱くなってしまう」

アイリー「こんなに熱くなってしまうなんて……はあ、ん、あ、あん……でももっと、もっと熱くしてほしい……身体がうずいて腰が動いてしまうう」

アイリー「こんな快感……久しく感じていなかったな……は、はあ……あ、んう」

アイリー「な、なあ……もういいだろう？ 私はもう準備万端だぞ？ お前のおちんぼだって、さっきからずっとびんびんじゃないかあ」

アイリー「入れて……このままあ、正常位でセックスしよう」

アイリー「熱くなったお前のおちんぼを、私の中に入れるんだ。私のおまんこ、熱々にしてえ」

アイリー「ん……んんっ！ あ、きた、熱くて固いの、入ってきたあっ……んああああああ」

アイリー「はっ、ふ……ふあ……いい、おちんぼ感じるう、奥まで、いっぱいにい……あ、は、んんんうっ」

アイリー「ん……ふう、おい、我が身体よ。頭をもっと近くへ、胸元まで持っていくんだ。もっと近くで見えるように……」

アイリー「すごい、な……ここからなら、さらによく見えるぞ。私のおまんこがあ、おちんぽ咥え込んでるう……」

アイリー「隙間もないくらいぴったりハマって……はふう……あう、本当に、すっごお……いい」

アイリー「ふうう……なあ？ 動いて、ゆっくり動いてえ……ん、ああ」

アイリー「あ、あ、ああ、すごい……出たり入ったり、おまんこのお肉がおちんぽ追いかけて盛り上がるのお……う、はっ、はう、やあああ」

アイリー「柔らかいお肉がこんなに動いて……あ、おちんぽ離したくないって言ってるう……んああああ」

アイリー「はっ、あ、ふあああ……おちんぽ引き抜くと、おまんこからぬるぬるの液体がいっぱい掻き出されてくるう……う、く、くううう、んあああ」

アイリー「熱い愛液がおしりまで垂れちゃうのお……んお、んんんっ、んんう」

アイリー「はああんっ……あんっ、そこお……んああっ、いいっ……！」

アイリー「んっ、あっ…ああっ。はふ……少しずつ、おちんぽの入る角度が変わってえ、私の気持ちイイところを突いてるう……あん、んんんっ」

アイリー「は、あああ……あっ、おしり側をぐりぐり押されるのもお……はう、んんう、あっあっあっ、ああああんん……お腹側をカリでかき回されるのも、どっちも気持ちいい……」

アイリー「身体から、快感が伝わってくるう……ん、あ、あああああっ。すごっ……気持ちいい、イイイっ」

アイリー「もっと、早くして！ 激しく突いてえ！ 気持ちイイから、もっとずぼずぼしてえ！」

アイリー「んんああああっ。ああ、うああっ……くっ、あ、はっ、すごっ……ふあああああああ」

アイリー「ふっ、ふあ、すごい……私、セックスしてる時ってこんななんだ……」

アイリー「よく、見えるよ……私、気持ちいいとおまんこの穴がきゅってなるんだあ……んふふ。はあ、はあ、はあ……」

アイリー「きゅ、きゅっ、って力が入ってるんだ……おちんぽをお、ぎゅうって……離さないように、もっと気持ち良くなりたいって……あああああ、すごい……」

アイリー「あああう、ん、ぐ……はっ、うああっ、あんあん、あああっ」

アイリー「はうっ……ふ、身体よ、夢中になってないで頭を動かせ。これは褒美なのだから、従者にももっと気持ち良くなってもらわねば」

アイリー「そう、そうだ。もっとくっつけて……は、ん……」

アイリー「れろれろれおおおお。んふふふ、セックスしながらお前の乳首を舐めてやるぞ？　えるお～、んん……はあ……あーるろろろお」

アイリー「あ、ああんっ……お前の乳首も立ってるじゃないかあ……吸ってほしいんだろう？　ちう、ちううう、るるるるっ。ふ、はっ、くうああああっ、ん。える、えろろろろお～」

アイリー「優しく、啞えてえ……はんむ、んむ、あんむ……ふはっ。あ、や、んんっ。あんっ、はむ、ふはう、んああう……あむ、吸ったりしてえ……んちゅう、ちううう、ぱはっ」

アイリー「次は逆の乳首もお……」

アイリー「こっちもお……えろ、えろえろろろろ……お、ん、えあ、るるるろお～……ん、ふは」

アイリー「え……へあ、ちょっと舐めただけですぐぴんぴんになったぞ♪　気持ちいいか？　ん？」

アイリー「もっと舐めてやろう……あんむ、えろ、えろ、るろろ。舐められるのと吸われるの、どっちが好きかな？　ちう、じゅるっ……ちうううう」

アイリー「吸いながら舐めることだってできるんだぞお……ぢるるるるるう、んはあ、ん、ちゅ、じゅるるる」

アイリー「こら、腰が止まってるぞ、自分ばかりずるいじゃないかあ」

アイリー「あ、あ、んあああっ！　おちんぽがおまんこの奥まで突き刺さるのお……！　これ、すごい気持ちいい！」

アイリー「はっ、うあああああ、だめ、だめえ……これはご褒美なんだから、私ばかり感じてちゃ……」

アイリー「もっと舐めてあげる……う、うううああっ。……えろ、ろろろろろん」

アイリー「柔らかい舌でえ、ぴんぴんに固くなった乳首舐めてあげるう……ん、ふあ、えろえろろ、えろえろえろ……」

アイリー「じゅるう……うんっ、ちう、じゅうううう、ぢううう、ぢるるるるる。えあ、ろあ、おん……るろろろろろお～。……ん、あ、ふううう、ん、あんっ」

アイリー「んああああ、ひゅごい……おひんぽお……もっと固くなっへえ……気持ちいい？　ほんらに気持ちいいのお？　は、あ、えう、うあああああ」

アイリー「私も気持ちいい……んんあああああ！　すごいつ、しゅごいいいい！　うあ
ああああああっ」

アイリー「も、もうダメ……だめえ……くう、うああああ、あっ、くう……い、イってし
まいそう……お前も、お前もなのか？」

アイリー「なあ、私の首を持って……最後はキスをしながら……な？　いいだろ？」

アイリー「ん、そう、目線を合わせて……月灯りの差し込む部屋で……快感によがる女の
穴におちんぼハメながらあ……主の生首に口づけをするんだ」

アイリー「ん……ちゅっ、ちゅ、ちう……舌あ出して、絡めながらあ……ふあ、ああん」

アイリー「おちんぽっ、動かしてえ……えう、ぢるる、んちゅっ……私の頭を抱きしめな
がらあ……へああああっ」

アイリー「いいからあ……私の髪がぐしゃぐしゃになるくらい、激しく抱きしめていいか
らっ……ん、はんむ……ちゅううう、あえ、えお、えああっ」

アイリー「あ……えあ、気持ちよすぎてえ……んぐ、んっぎい……はっ、らめえ……も
う、ううううあああああ」

アイリー「わらひの頭、離しちゃらめらぞ……ん、ちゅう、あえ、えろろ、む……おあ、
えあああああ」

アイリー「あっ、えあっ、あ、らめえ……一緒に、一緒にイこう……んああああ、あああ
っ！　もうダメ、イク、イキそうっ！　あああああ」

アイリー「来て、来てえ！　一番奥に、熱いのお……ん、えあああああああああ！」

アイリー「んっ……あああ、ああ……は、ふは、えあ、あ……」

アイリー「す、すごい……お腹のなか、ぽかぽかだ……あったかい……ん、ふはあ、は
う」

アイリー「はあ……はあ……ん。あ……すごい、おまんこから、白いどろどろがいっぱい
出てくる」

アイリー「ふうううう、ん……あはあ、こんなにたくさん出してくれて……私もうれしい
よ」

アイリー「んっふっふっ。それにしても……なかなか立派なものを持ってるじゃないか。
いいぞ、肌を重ねて、私はより一層お前の事を気に入ってしまったよ」

5. 休憩 ～生首だっこ～

アイリー「……ふう、ちょっと疲れたな。私の身体も横になったまま動かんし……よし、お前、そこに座って私を持て」

アイリー「そうだ、優しく、静かにだぞ……」

アイリー「うむ……温かい……」

アイリー「勘違いされがちだがな、アンデッドは死者そのものではなく、死を超越した存在のことをいうのだ」

アイリー「つまり……私も遥か昔はお前と同じ人間だったということだ」

アイリー「その時の記憶などまったく残っていないが、この心地よいぬくもりにはどこか懐かしさを覚えるな……」

アイリー「なあ……その温かい手で少し頭を撫でてくれないか？」

アイリー「んふふ……うん、いいぞ、まだ少し恐る恐るといった感じだが……優しい手つきだ。その調子で頼む」

アイリー「ああ……別に私は、この身体になったことを後悔なんてしていないぞ？ もしも憐れんでいるのなら勘違いだ。むしろいいことばかりだと、本気で思っているからな」

アイリー「ん？ ただ頭と胴体が繋がっていないだけで、時折普通の女の子のように感じると？」

アイリー「確かに……デュラハンなのに……なぜか愛馬が、時折私の言うことを聞かなくなったり……」

アイリー「身体の方も、首が繋がっていないせいか、たまに制御不能になるし……」

アイリー「つい先日も、読書中に尿意を催したことがあってな……いい所だったので身体だけでトイレへ行くよう命じたんだ」

アイリー「そうしたら、帰ってきてから一向にページをめくってくれなくなってな。大変だったのだ……」

アイリー「ははは、笑ってくれ。唇で無理やりページをめくろうとして、口の端を切ってしまったよ」

アイリー「……そ、その……お前さえよければ、本当にずっとこの屋敷にいてもいいんだぞ……？」

アイリー「私からの褒美も……ずいぶん気に入ってくれたようだし、な？」

アイリー「そうだ、疲れただろう？ 特別に頭のマッサージをしてやろう。屋敷には私の
頭を手入れする設備が整っているからな！」

アイリー「私の従者たるもの、常に清潔にしてもらわねば」

アイリー「そうだ、そうしよう。それがいい！」

アイリー「そうと決まれば、我が身体よ、いつまで寝ている！ さあバスルームへゆく
ぞ！」

6. ヘッドマッサージ ～デュラハン式洗髪～

アイリー「んふふふ、では、私がいつもやっているヘッドマッサージをしてやろう。特別だぞ？」

アイリー「ま、実際に手を動かすのは私の身体だがな。私はすぐ隣の机からしっかり監督しているから、安心して身を任せるといい」

アイリー「よし、まずはそこへ座ってくれ。そのまま椅子の背もたれを倒すからな」

アイリー「ではまず、ブラシで髪をとかすところからだ」

アイリー「気づかない内に、ゴミや抜けた毛がからまっていたりするものなんだ。それをブラシで落としていく」

アイリー「さっさっ……と。んむ、お前は髪が短いから、こんなところかな」

アイリー「よし……次は髪を濡らすために水を……」

アイリー「おっと！ いかん、こっちの水道は血も出るようにしてあったのだった」

アイリー「いや、ほら、血で洗うといつまでも美しくいられるなんて話を聞いたことがあったのでな」

アイリー「いやあ失敗失敗……はははっ」

アイリー「改めてこっちの……別の水道を使うとしよう」

アイリー「よし、頭を流すぞ。水が冷たすぎたりしないか？」

アイリー「うむ、平気ならよかった。私はアンデッドのせいか、温度の変化に疎くてな。気になったら我慢せずに言ってくれ」

アイリー「髪の根本までしっかり濡らして……こんなものかな」

アイリー「ではシャンプーをしていこう」

アイリー「このシャンプーは私が配合した特別製でな。樹海を走り回って集めた薬草から作ったのだ。……まあ、走り回ったのは主に身体と愛馬だが」

アイリー「この特別製のシャンプーを惜しみなく、た～っぷり使っていくぞ」

アイリー「しっかり泡立てて洗っていくからな」

アイリー「痛かったり、かゆい所はないか？ 気を遣わずに言ってくれ」

アイリー「髪を綺麗にするだけでなく、頭皮のマッサージも兼ねているからな。念入りにやっていくぞ」

アイリー「長年自分の頭を洗い続けて身に着けたこの技術でちゃんとお前を癒してやるからな」

アイリー「ん……しょ……よい、しょ……」

アイリー「気持ちいいか？ できるだけ身体力を抜いてリラックスしてくれ」

アイリー「ん……と、よいしょ……ん、しょ……」

アイリー「ちゃんとした人間をやるのも大変だよな。社会のしがらみの中で肩ひじ張り続けて……」

アイリー「よーし、こんなもんか」

アイリー「ではシャンプーを流していくぞ」

アイリー「しゃかしゃかしゃか……っと」

アイリー「しっかりぬめりを落とさないと頭皮によくないからな」

アイリー「んしょ、んしょ……耳の裏までしっかり流して……でも、耳に水が入らないように気をつけて……んしょ、んしょ」

アイリー「よーし、いいだろう」

アイリー「大きいタオルで頭を包むようにして水気をとっていこう」

アイリー「よいしょ、よいしょ、んしょ、んしょ………どうかな？」

アイリー「私と同じ匂いがするな。すう～、はあ～……すう～、はあ～……んっふっふっ」

アイリー「見違えるほど綺麗になったじゃないか。うん、良い髪質をしている。毎日手入れをしていれば、きっと私の髪のようにサラサラになるぞ」

アイリー「ん？ ……んん？ おやあ？」

アイリー「むふ、なんだ？ お前。勃起しているではないか」

アイリー「むふ、むふふ……これは一体どうしたことかな？ 今のはただの洗髪だったはずだが？」

アイリー「なに？ ……ほう、マッサージ中に胸が当たっていた？ まったく、お前というやつは。んふふふ」

アイリー「おっぱいが好きなお前のために、わざと当ててやってたんだ」

アイリー「またご褒美が欲しくなったようだな……？ 仕方がない、特別だぞ？」

7. 二回戦 ～デュラハン式騎乗位～

アイリー「さてきて、どうしたものかな？」

アイリー「んふ……んふふ、おちんぽがいきりたっているぞ？ そんなに興奮しているのか？」

アイリー「さっきシたばかりなのになぁ？」

アイリー「そんなに私とセックスしたいのか？」

アイリー「仕方ない……それでは、また相手してやろうか」

アイリー「仰向けになれ。今度は私が上に乗ってやろう」

アイリー「いやー……私ほど従者思いの主はいないと思うぞ？」

アイリー「お前が望むだけの褒美をくれてやろうというんだ。私は優しいからな。はっはっはっ！」

アイリー「よし、我が頭はお前の顔の横へ置いておくとしよう。快感によがる従者の顔がよーく見えるようにな……んふふ」

アイリー「んっ？ おい待て。私の身体。急にどうした？ 勝手に動くんじゃない。あっ、ちょっ……！」

アイリー「急に従者を押し倒して……おい、お前……大丈夫か？ 急に押し倒されてどこか痛めていないか？」

アイリー「待て待て、我が身体よ、そんな……いきなり従者に馬乗りになって……おちんぽ握りしめて……あ、おまんこに擦りつけるんじゃない」

アイリー「んんう……ん、はっ、あん……くっ、なんで……？ 私のおまんこ、もう濡れちゃってるのか？」

アイリー「待ってくれ……ん、はあ……こんなのお、私が従者とのセックスを待ち遠しく思ってたみたいじゃないかあ」

アイリー「ちが、ちがうんだぞ……これは……はう……お前へのご褒美で……ううん、ああっ、んああっ」

アイリー「あ、あ、あっ、ああっ、固いおちんぽが、私のクリトリスぐりぐりするう……ぬるぬるの亀頭で、敏感なところ擦っちゃだめえ……あう、ん、はあああ」

アイリー「これは……本当に、違うの、違うからあ……私の意思じゃない……身体がっ、ああっ！ あ、ふ、ふああん」

アイリー「身体が勝手にい……発情してえ……！ んああう」

アイリー「ん……はあ、はあ、はあう……違うのにい……私はお前の主で、ご褒美として
お前を気持ち良くさせてやらなくちゃいけないのにい……」

アイリー「う……ん、はふ、やばい……入れたい……おちんぽ入れたい……」

アイリー「あう……んは……いや、待て、落ち着け。はあ、はあ、ふう、こんなに身体が
発情した状態でおちんぽ入れたら、絶対おかしくなってしまうう……うああ
あ、んんんっ」

アイリー「いったん……待ってくれ身体よ。私にはデュラハンとしての尊厳が。……んあ
あ、アンデッドとして、長く生きてきた者としての威厳が……」

アイリー「おい、待て、言うことを聞け、私の身体っ……！ おちんぽを、おまんこの穴
に……」

アイリー「とまれ、とまってえ……あ、入っちゃうう、かたいおちんぽ入っちゃうう……
んひゃああああっ！」

アイリー「あゝ……が、お、ふ……そんな一気に奥まで……びっくりするではないか……
…」

アイリー「ん……ぐっ、ふ、ふう……身体が言う事を聞かないことは確かにあるが、ここ
まで制御が効かないなんてことは滅多に……」

アイリー「先ほどの洗髪中もお……ふ、う、ただ胸を当てるだけではなく、やたら乳首の
辺りを擦るからあ、少し変だとは思っていたが……」

アイリー「おい、今度は何を……脱ぐのか、鎧も、下着も、すべて脱ぐつもりか」

アイリー「一気に鎧をすべて脱ぎ捨ててしまうとは。これはまずい……動きやすくなって
しまった。もう、止められないかも」

アイリー「んんっ、そんないやらしい手つきで自分のおっぱいを揉むな！ ん、ふ……バ
カあ、はしたないぞ！ ううう……」

アイリー「ふあああ、だめ、乳首を自分の指ですりすりするなあ……んあああああ」

/アイリー「そんな優しく、先端を擦って……ふっ、はあ、ダメえ、自分の身体だから、一
番気持ちいい触りかた覚えちゃってるのお……んんんう、ああああ」

アイリー「あひあ……あ、へ、へああああ……ダメだ。頭が、身体の快感に支配される……
ん、ふ……、気持ちいいことしか考えられなくなるう……」

アイリー「う……が、やば、腰があ……腰が動く、動いちゃうう……こんなの無理い。ダ
メになるう……」

アイリー「お、あっ……おゝ おゝ あゝ っ……んぐう、おふうああああっ」

アイリー「これ、ダメっ……頭の中までびりびりくるう……ん` あ` あ` あ` あ` っ！
んぎもちいいっ！」

アイリー「おお、……すごっ！　すごい……んぐ、はっ！　これやばいい……お` お`
お` っ……おちんぼ、やばいい……」

アイリー「ら、らめえ……私は人から恐れられる存在なのに、デュラハンなのに……
お、ほおう、っがあああ！　いや、いやあ……」

アイリー「ダメ、こっち見ないで。私の顔見ないでえ！」

アイリー「やだ、やだよお……従者に見られちゃうう。気持ち良すぎてぐちゃぐちゃにな
ってる顔をお……」

アイリー「だめだめだめ、こんな乱れた顔、人間なんかに、従者に見せちゃだめなのにい
……ふああああっ」

アイリー「お、おふ……おちんぽで突かれてえ、舌が出ちゃうほどおかしくなってるデュ
ラハンなんて見ないでえっ！　あふえ、へおっ、えおっ、へおおおおっ！」

アイリー「らめらめらめえ……こんなのらめなのお……いやああああ！　お、ご、あがあ
……おふう……ふううう、んっほおおあああああ！」

アイリー「んごおっ！　おほっ、おまんこあづいい！　んおおおおおあああっ、きもち
っ、んぎもちいいっ！　うあああああっ！」

アイリー「奥、力いっぱい突かれるほお、恥ずかしい声出ひゃうう……ん、ごあ、ほお、
おふっ、ふうあああああああっ」

アイリー「うほあああああああっ……おがしくなるう……これダメええええ、んああああ
あっ」

アイリー「お、おほお……誇り高きデュラハンがあ……こんな獣のような声をお……ふ
う、ふっ、ふおおおおおっ！」

アイリー「でも、もう無理い！　理性なんか、どっか飛んでっちゃったあ！」

アイリー「もうなんでもいいからあっ！　んぐっ、んっあが、あ` あ` あ` あ` っ！　め
ちゃくちゃにしてえ！」

アイリー「ああああ、くるっ、ぐるう……おっ、ほおおおお！　お、おん、お` お` お`
ん` ！　いぐっ、いぐいぐっ……いっぐう……らめ、いぐっいぐっいぐっ！
あ` あ` あ` あ` あ` ~!!」

アイリー「あ……が、ぐ……ふあ……、ほ、あう、ふ……」

アイリー「しゅご……しゅごいい……うあ、いっぱい出てる。中に熱いの出てるうう…
…」

アイリー「ん、ほっ、こんなのお……凄すぎてえ……アンデッドの子宮に子種宿っちゃう
う……」

アイリー「ん、ん`ん` う……へ？ あ？ ふあっ！ ひやあっ！ ま、待って、今イッ
たばっか……」

アイリー「んおっほおおお！ おちんぽおおお！ あっ、あっ！ まだぐるう……あ、
あ`あ`あ` ……んがっ、くううう……んっはっ、う、んはう……んぎもちい
い！！」

アイリー「ん`あ`あ`あ`っ……イってる、イっへるう……イキっぱなしでバカになっ
てりゅううう……んうおっほおおおおお、おまんごおおおお、おまんごイっへ
りゅううううう！」

アイリー「お前も、お前も全部出せっ！ このままっ！ 腹上死してアンデッドになっ
ちゃうくらい出してしまええっ」

アイリー「んおおっ！ おふううううん！ イぐう！ また、大ひいの、くるっ……
イぐイぐイぐイぐっ、イっぐううううう！」

アイリー「お、が……ふ、あひゅ、ふう……もう、もういっぱい……」

アイリー「ん……、あ、入りきらなかった精子が、おまんこから溢れてる……」

アイリー「んぎいいい！ もう無理、やだ、止めて……！ 止まってえ私の身体あっ！」

アイリー「んおおおおおっ！ おふっ、ひはっ、へひい……んっぐううううふああああ
あっ！ 無理無理無理いいいいい！」

アイリー「まさか、アンデッドなのにい、気持ちよすぎへ死にそうになるなんへえ……ん
っほおおおおおううううう！ んがはっ、はんぐっ、ふおおおおあああ
ああああっ！」

アイリー「お前も、全部出しへえっ！ もう、これでっ！ おしまい、ね？ おしまいい
いいい……私が全部搾り取るからあっ！ イって、イってえええええ!!」

アイリー「ん`あ`あ`あ`あ`あ`あ`っ！ おほああああああ……いぐううううう
っ!!」

アイリー「ぎ、ぐ……はっ、あへえ……あ、身体、力入らない……。でも、ようやく止ま
った……」

アイリー「はあ……はあ……すまん、少しだけ、身を預けていいか？」

アイリー「はあ……はあ……ふう。アンデッドとして長い長い時間を過ごしてきたが…
…」

アイリー「こんなに気持ち良かったのは初めてだよ」

アイリー「少し休ませてくれ……」

8. 【ルート分岐】質問 ～お屋敷から帰れない～

アイリー「ん、ふう……。お前、私の首を目の前のテーブルに立たせてくれないか？」

アイリー「……ふう。少し取り乱してしまったな……」

アイリー「さて……おほんっ」

アイリー「んっふっふっ……。どうだ、ちょっと予想外の展開だったが……き、気持ち良かっただろう？」

アイリー「お前が私の従者になれば――」

アイリー「もっとたくさんご褒美をやるぞ……。♪」

アイリー「そ、それに、さきほどのように、また身体が暴走するかもしれんしな。そういう時の世話も、お前なら……いいだろう？」

アイリー「なんだかんだで、お前も楽しんでいたじゃないか？ なあ？」

アイリー「さあ、私の従者になると誓え。さあさあ、今ここで誓うんだ！」

アイリー「……まあどのみち、『はい』と言うまでこの屋敷から逃がすつもりはなかったが……」

アイリー「ん？ ただの従者では嫌か？ ふむ……。ならば私と同じく、首を落としてデュラハンになるというのはどうだ？」

アイリー「ああ、もちろん可能だとも。私は死の使い。仲間を増やすことなど造作もない」

アイリー「くくく、私自らお前の首を落としてやるのだ。名誉なことだぞ？」

アイリー「まだ人間のお前には想像し難いかもしれんが……実際、頭と身体が別々なのはいいことだらけだしな」

アイリー「身軽になった分、こうして少しくらいなら机の上を自由に転がれるし……」

アイリー「頭なんていう重い物が乗っかっていないから、肩も凝らんしな」

アイリー「それにな、アンデッドは楽でいいぞ？」

アイリー「たとえば……飯を食べなくても死なないし、かと言って味覚が無くなるわけでもないから、食事という行為を楽しむことはできる」

アイリー「生きるために必要だった欲求を、すべてただの趣味として楽しむことができるのだ」

アイリー「絶対にしなくてはいけなかったものが、やってもいいしやらなくてもよくなる。楽しいぞ〜？ この世の見え方がまるで変わってしまうくらいにな！」

アイリー「まあ……どちらにせよ従者になることは決まっているのだ。生きたまま私に仕えるか、死んで新たな自分になるか、選ばせてやろう……んふふふふふ」

アイリー「私はどちらでも構わんよ」

アイリー「ずっと私と一緒にいてくれるなら、な？」

アイリー「さあ、どうする？」

9 a. 【従者ルート】 不死の生首とセックス ～デュラハンのお世話係～

アイリー「うんうん、いい心地だ。シャンプーをするのもうまいじゃないか」

アイリー「一度やってみせた甲斐があったな。物覚えの早い良い子だ。今後も主人の首をお世話するために励むといい」

アイリー「よし、そろそろいいだろう。タオルで拭いてくれ」

アイリー「んっふっふっ、いい従者が来てくれてうれしいぞ……」

アイリー「ん？ なんだ、そわそわして」

アイリー「私の髪に触れて思い出してしまったか？ そういえば、おちんぽに髪を巻いてシゴいてやったことがあったっけな」

アイリー「そういうところまで物覚えのいい、悪い子だ」

アイリー「それだけ記憶力があるなら、私とのセックスも、私の身体をどうしたら気持ち良くなるのかも、覚えているんだろう？」

アイリー「……では、そちらの腕も見てやろう」

アイリー「従者を鍛えるのも主人の務めだからな……んふふ」

アイリー「ん～？ 後ろから抱き着かれるまで、近づく我が身体に気づかなかったか？ それとも分かっていた無抵抗だったのかな？」

アイリー「さあ、私の身体を押し倒せ。お前の成長を見せてみろ」

アイリー「ふ……ん、は……細くて温かい指が私の肌を撫でていく……触れられたところが熱を帯び、敏感になっていくよ」

アイリー「んん……あふ、うん、気持ちがいいぞ……だが、少しもどかしい」

アイリー「従者なら、私がいま一番欲しいものがなにか、分かるよな？」

アイリー「おちんぽ……いれて」

アイリー「んふふ。お前と同じように、私も欲情してしまっているようだ……」

アイリー「さあ、こい……」

アイリー「あああっ、きたあ……かたいおちんぽきたあ。ふっ……んんっ、おまんこの一番奥までえ……くっ、うあああ……ふ」

アイリー「すごい……熱い……おまんこの中で、びくびく動いてるの感じるう。いい、いいぞ……これえ、最高だあ」

アイリー「んっ……はあっ……あああ、さすが私の従者だあ……ほら、抱きしめてやろう。お前は私のおっぱいが大好きだからなあ」

アイリー「我が身体よ、私の頭を持て。従者を抱きしめながら、耳元で支えていてくれ」

アイリー「ここからなら……なるほどな、お前には私の身体がこう見えているのか」

アイリー「さあ、がんばって腰を振るんだ」

アイリー「うんんっ、はあああ……従者おちんぼ、気持ちイイ！ このおちんぼはもう私だけのものなんだっ……ああん」

アイリー「ちんぽだけじゃない。全部、お前のすべては私のもの……」

アイリー「この耳も……はむ、あんむ、ふはっ……んあっ、えろお……るろろろ……おん、ほ、おおん……えるう～、んっはっ……あふ」

アイリー「はあ、はあ……耳を舐められたからって、腰を止めるんじゃないぞお……あはあ、そう、そこ！ 気持ちイイところ、当たってるっ」

アイリー「私も、がんばっちゃうからあ……んちゅ、ちううう……はぶ、えるろろろろ、ちるっ……ん、ちゆるるるるるるっ、んふーっ、ふーっ、ひいああああああ」

アイリー「見ろ、私の身体も反応してびくびく痙攣してるだろう？ お前のおちんぼが奥を突くたび、腰が反応してしまってるんだあ」

アイリー「ご主人様のおまんこ、気持ちイイ？」

アイリー「気持ちいいに決まってるよな？ 夢中になって腰振って……ほらあ……もっとお」

アイリー「んあああ、う、ぐ……おふ、ふうん、おふあ……歯を食いしばって快感に耐えてるのか？ 首の筋が張ってるぞお」

アイリー「いーっぱい舐めてやろう……えろろろお～、ん……汗かいて……しょっぱい、んふふ……がんばれ、がんばれ……んんっ、うあああっ……」

アイリー「じゆるるん、ん、ふ、はああああん……く、う、あ、ああ、んうあああ」

アイリー「ご主人様とセックスできて幸せだな？ こんなに気持ちいいこと、これからずっとできるんだもんな？」

アイリー「あ……んはっ……すごおい、どんどんかたくなる……奥の奥まで届くう……」

アイリー「お前もお……感じるか？ 私のおまんこの中、どんな感触だ？」

アイリー「入口がきゅうきゅう締まって、おちんぼしごいてるだろ？」

アイリー「ひだひだが絡みつく摩擦はぞくぞくするか？ んああっ！ 一番奥、少し固いところに亀頭押し付けるの、お前も好きなのか？」

アイリー「ああああ気持ちいい。私も感じてしまう、もっとおちんぼ欲しくて腰が動いてしまうう」

アイリー「激しくして……もっと、意識が飛ぶような快感がほしい」

アイリー「一緒におかしくなる？ すべてをさらけ出して、めちゃくちゃになる？」

アイリー「んっほおおお……ぐ、ん、んんんうっ！ あ、もっと、もっとお……！」

アイリー「えっちな音、響いてる……うああああ、んんんううう、思いつきり、腰を打ち付けて……んっがああああああ」

アイリー「あ、あ、ああああ、ダメだ、もうイっちゃうかも……ん、んふ、ふううう、おおお……お前はやめちゃダメだからな。私がイっても、おちんぼ止めないでえ！」

アイリー「はーっ、はーっ、んんんっ……うふ、ほおおお、ぎい……イッグ……ダメえイグう……」

アイリー「あゝ あゝ あゝ ———っ!! おっ、おっ、ほっ……ふうううおおおお。イっでるう、おまんこ痙攣してイっでるうううう」

アイリー「お、おああ、もっど、もっどおおお！ んぎもちいいの、もっとしでえええええええ！」

アイリー「ああああ、らめらめらめえ……すっごいの、きてるう……んゝ あゝ あゝ あゝ あゝ っ！」

アイリー「イグの、止まんない！ あひああああ、へ、あふ、あへええええ。それえっ、好きっ、好ぎいっ、もっとして！ やめないでえ！」

アイリー「お前もイキそうなのか？ いい、いゝ いゝ ぞっ！ その代わり、全部出すまでやめちゃダメだからなあ！ おおあああああっ」

アイリー「へ、ひ、ひいあああっ！ んーっ、んーっ……あっかあああああ、出しへええええええ」

アイリー「うううう熱い……身体の芯から熱くなる……この感じい、最っ高う……」

アイリー「ほら、ねえ？ もっと、もっとできるだろお？ 精子でぐちょぐちょになったおまんこ、射精して敏感になったおちんぼでもっと掻き回して！」

アイリー「あっはああああああ、おがしくなるう……お前と出会わなきゃ、こんなセックス知らなかったあ……あへえあああああ、んぐ、お、おふううううおおおおおっ！」

アイリー「へ、ひえあ……んがあああああ、ああああん……んっ、んほおおおおお」

アイリー「お前も、もう限界か？ よし、じゃあ……最後まで思いっきりい！ わらしも、イグからあ……んんんっ」

アイリー「きて、きてえ！ あっおおおおおううう、んぐ、んぎい……いぐううううう、いぐいぐいぐっ……いっぐうううううう」

アイリー「はーっ、はーっ、はーっ、ん……ふーっ、うう、ふ、んん」

アイリー「ああ……感じる。子宮の中に生命を感じるぞ」

アイリー「必死に生きようという力強さ。しかし一瞬で失われてしまう儚さ。それらすべての命をアンデッドである私の子宮が飲み込んでいく……」

アイリー「ああ……なんて心地よい……。たまらないい、この満たされていく快感……はあ～」

アイリー「はあ、はあ……ふう。おい、従者よ。お前……私の頭を持て」

アイリー「そして、誓いの口づけを……」

アイリー「私の従者として、その命のすべてを捧げると誓い、我が生首にキスをするんだ」

アイリー「……ちゅっ」

アイリー「んふふ……ねえ、気持ちいいから、もうっかい……」

アイリー「……ちゅっ」

9 b. 【斬首ルート】永遠の儀式 ～首無しの仲間入り～

アイリー「そうか……お前も首を切り落とし、誇り高きデュラハンになりたいと言うのだな？」

アイリー「その望み、叶えてやるぞ……」

アイリー「こちらへ。付いてこい」

アイリー「ここだ。この地下室に入りたまえ」

アイリー「暗くて見えないな……今、ろうそくに明かりを灯す」

アイリー「この部屋はかつて処刑場として使われていたが、今は……デュラハンの仲間を増やすための儀式場として使っている」

アイリー「そこの台に座って待っている。すぐに準備をする」

アイリー「まずは改めてお前の髪を櫛でとかし、まとめておく」

アイリー「首を切る際に邪魔にならないように」

アイリー「特製シャンプーのおかげでさらさらだな。たった一回で見違えるほど綺麗になっているぞ」

アイリー「これからも続けていけば、もっと艶が出て美しい髪になるだろう……」

アイリー「身体がこわばっているな……よし、マッサージもしてやろう」

アイリー「少しでも筋肉をほぐし柔らかくしておいた方が首を切りやすいだろうからな」

アイリー「こんなに細い肩に、たくさんの重荷を背負ってきたのだな」

アイリー「安心しろ。すぐに楽になる」

アイリー「んしょ、んしょ、んしょ……ふう。痛くはないか？」

アイリー「筋肉の付き方でどれだけお前が働き者だったか分かる」

アイリー「これからはその力、私のためだけに使ってくれ」

アイリー「ふむ……これくらいにしておこう」

アイリー「この後はいよいよ斬首だ。そこの台に横になっていてくれ。最後の準備をする」

アイリー「この剣でお前の首を落とす」

アイリー「普段から手入れはしっかりしているが……今回は特に大事な儀式。しっかり研ぎなおしておこう」

アイリー「……はっ、よっ……んしょ、んしょ」

アイリー「痛みを感じないよう、一瞬で切り落としてやるからな」

アイリー「……心配はいらない。デュラハンに首を落とされて殺されたものは、同じくデュラハンとなって甦るのだ」

アイリー「怖いかな？ もし怖いのなら、それはまだ未練があるからだ。ここまできたら腹をくくれ。そしてこれからやってくる未来に希望を見出せばいい」

アイリー「お前には永遠に近い時間が与えられる。なにかをすぐにやる必要はない。お前のペースでやりたい事をゆっくりやっていいんだ」

アイリー「よし、こんなものかな」

アイリー「さて……」

アイリー「いよいよだ。覚悟を決めたら、目を閉じて深く呼吸をしろ」

アイリー「私も集中しよう。確実に一撃で決められるように」

アイリー「すう～、はぁ～……すう～、はぁ～（深呼吸）」

アイリー「お前が死んで……永遠に私に仕えるのを、楽しみにしているぞ……♪」

アイリー「では、ゆくぞ」

アイリー「さてどうかな？ 私の声が聞こえているか？」

アイリー「んふふっ……おめでとう、死を乗り越えし者よ」

アイリー「ちゃんとデュラハンになれたようだな」

アイリー「これで……永遠に一緒だな」

アイリー「覚悟しろよ♪」

(END)